

## はじめに

2017年から2019年の2年間、ココネ言語教育研究所（CIFLE）にて、英語教育の諸相についての動画講義を集中的に制作する絶好の機会を得た。できた動画は、150本を超える。内容的には、私が慶應義塾大学SFCの大学・大学院の講義を動画として収録したものが多いが、大学の講義でカバーしなかったものも、これまた多い。なお、現在は、CIFLEをPEN言語教育サービス(PLES)として、引き継いでいる。

私は、数多くの論文を国内外で発表してきたが、動画という形で講義をまとめるという作業は、論文制作とはだいぶ異なる、創造的で生産的な営みであることに気づいた。ひとつの動画を撮り、その内容を反省的見地から振り返ると、新たなアイデアが次々に出てくる。動画の本数が増えるにしたがって、アイデアが繋がり、新しい動画講義が生まれるといった具合に、である。自分の講義を繰り返し視聴することで、論文では経験したことのないような、アイデアの編集作業が可能となるのである。その結果が、150本を超える動画講義である。

改めて講義リストを検討してみると、エクササイズ論、評価論、英語力論といった具合にまとめていくことができ、それらを総合すると、「英語教師力アップの要件」が明らかになると直観した。そこで、本企画では、「英語教育：理論と実践」と名打って、何巻かの「動画講義ブック」のようなものを作成しようと考えた。「動画を視聴しながらノートテキングができる」という発想である。そのため、本企画では、講義で使ったスライドを冊子の形にまとめ、QRコードを利用することで、いつでも動画講義にアクセスできるようにした。

本巻は「英語教育：理論と実践」シリーズの第3巻である。ここで取り上げるのは、エクササイズ論である。具体的には、本巻は、以下の8つ

の講義から構成される。

講義 1：エクササイズ論 総論

講義 2：気づき (Awareness-Raising)

講義 3：関連化 (Networking) Task-based Instruction

講義 4：理解と産出 (Comprehension & Production)

講義 5：自動化 (Automatization)

講義 6：Meaningful であること

講義 7：Authentic であること

講義 8：Personal であること

学習者が英語力を身につけるためには、エクササイズ (演習、問題、ドリル、活動などを含む) が不可欠である。母語のように自然に言語を身につける場合は、エクササイズは不要かもしれない。しかし、教室で英語を第二言語あるいは外国語として学ぶという状況では、エクササイズが教育の本丸となる。エクササイズの善し悪しが英語学習の成否を決める。

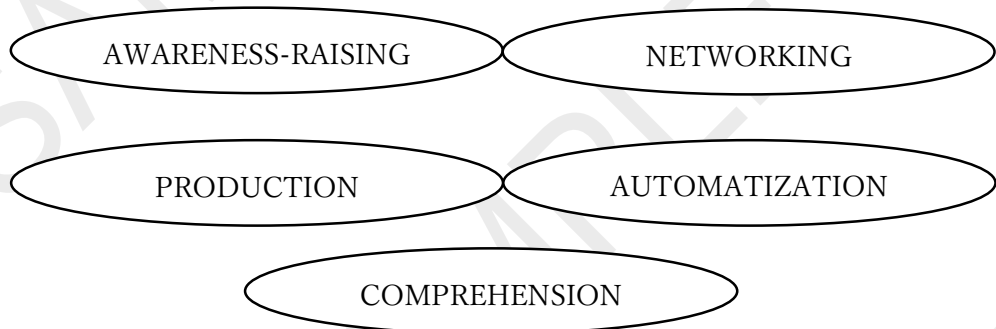
本来、スポーツのエクササイズがそうであるように、理論による裏付けがなければならない。野球の素振り、エクササイズですが、そこには理論がある。相撲の四股ふみにおいても同様だろう。しかし、英語教育の分野では、書き換え、並べ替え、空所補充、英文和訳、和文英訳、音読、ペアワークなど一連のエクササイズが教科書や問題集などで再生産されてきているものの、その教育的意義が反省的な見地から検討されることはなかったように思う。

エクササイズのオブジェクティブズ

フィンランドのある教師から、「『これは何のためのエクササイズか』ということを実感したうえで生徒にそれをやらせる」ということを聞いた

たことがある。これは、プロの教師としての説明責任にかかわる事柄である。日本の英語教育ではどうだろうか。「2つの文を関係代名詞を使って1文にする」という課題は何のためのものかと聞かれると、「関係代名詞の使い方を教える」といったこと以外、その活動の目的を自覚している教師は多くないのではないかと思う。

そこで、この講義では、英語教育におけるエクササイズの目的について、われわれの考えを述べる。結論を先にいうと、以下の5つが目的として含まれる。



この講義では、まず、講義1でエクササイズの総論を述べる。そして、講義2から講義5では、ここで示した目的のそれぞれについて説明する。さらに、エクササイズの質を決める論点としてMAP (meaningful, authentic, personal) を提唱する。すなわち、生徒にとって meaningful で、authentic で、personal な教材と活動を行うことが良質の英語教育につながるという主張である。講義6から講義8では、「meaningful であること」「authentic であること」「personal であること」について論述する。

田中茂範

PEN 言語教育サービス代表

慶應義塾大学名誉教授



動画をスキャンください。

# Lecture 1

## PLES講義 エクササイズ論・総論

田中茂範  
PEN言語教育サービス代表  
慶應義塾大学名誉教授

### NOTES

### エクササイズ

- 練習
  - 問題
  - 演習
- } 問題集, 練習帳, 演習帳

中味: 置き換え, 空所補充, 並べ替え, 英文和訳, 和文英訳, 語彙選択, 誤りの発見, 音読, ディクテーション, 読解問題, 入試の過去問……

## なんのためのエクササイズか： エクササイズの正当化

「この書き換え問題は何の役にたつのですか？」

### 教師の予想リスポンス

- 「これまでずっとこんな感じだったし、英語の問題集はこんなもんだろう」
- 「どの問題集を見ても同じ感じ」
- 「なんとなく問題集を消化させるのが英語学習の一環」
- 「こんな問題が受験(模試)に役立つ」

---

## エクササイズ論の欠如

スポーツのエクササイズはちゃんと理論に裏付けられている。

- 野球の素振り
- 筋トレ
- ピッチング練習

しかし、英語教育のエクササイズには確固たる理論がない。  
問題集の形式が再生産されてきた。

## エクササイズ＝英語教育の本丸

エクササイズなくして英語教育はない(これが自然な母語習得と異なる点)

生徒はエクササイズを通して英語を学ぶ

良質のエクササイズが良質の英語教育に導く

そのためのエクササイズ論が必要である

---

## エクササイズ論の全体像

A theory of Exercises

Objectives	-----	目的
Materials	-----	素材(言語素材と言語活動)
Media	-----	メディア

(1)何のために、(2)どういふ英語素材と言語活動を使って、そして(3)どういふメディアを使ってエクササイズを提供するか。

## オブジェクティブズ論

Level of Understanding: 観照の知(テオリア)

- Awareness-raising なるほどそうかという気づき
- Networking 有機的な関連化

Level of Using: 実践の知(プラクシス)

- Comprehension 英語の理解
- Production 英語の産出
- Automatization 英語運用上の自動化

---

## 気づきを高める: awareness-raising

awareness-raising (なるほどという気づきを高める)

awareness-raisingとは「気づきを高める」ということ。気づきの対象には、英語の学び方、単語の意味のとらえ方、日英語比較、ある表現の言語使用上の注意点、会話の文法など多種多様。「気づき」を目的にしたエクササイズでは、「あつ、そうか」という「わかる感覚」を引き出すことがポイントである。

何を何のためにどう学ぶのかという気づき

➡やる気を起こし、有意味学習を高める。

## 文法や語彙に関する気づきの具体例

英語学習過程は「疑問」の連続である

- 前置詞のtoと不定詞のtoの関連性はあるのか？
- 疑問詞のwhoやwhichと関係代名詞のwhoやwhichの関連性は？
- 一般動詞のhaveと現在完了形のhaveの関連性は？
- haveとbeの違い: どうして受動態はbeを使うのか？
- inとonとatの違い: be disappointed inとbe disappointed atの違いは？
- seeとlookとwatchの違い: lookとwatchは進行形ができるのにseeは進行形にならないのはどうして？

---

## 関連化: networking

**networking** (関連化: 項目同士を有機的につなぐ)

学習というのは、時間をかけて行うもので、一度にすべての項目を学ぶことはできない。そこで、項目ごとに次々と学ぶということになる。項目がバラバラで断片化しては英語力にはならない。英語知識を英語力にするには、点と点をつなぐ(connecting the dots)ということが必要。これがnetworking(関連化)。

- 学んだ内容の点をつなぐやり方
- ネットワークとして学習項目を提示するやり方



## 関連化の具体例

語彙間ネットワーク:話題別, 概念別, 連想, 事物配置  
文法の時制(テンスとアスペクト)のネットワーク  
後置修飾のしかたの表現ネットワーク  
takeが使われる多様な状況(語義)のネットワーク  
慣用表現のネットワーク

---

## 理解:comprehension

**comprehension (理解:英語表現の理解)**

comprehension(理解)のためのエクササイズでは, 英語表現を英語的に理解することを目的とする。日本語(あるいは別の英語)に置き換えるのではなく, 英語的な発想で英語表現を理解すること。英語で表現された事態を構成すること, これがcomprehensionである。

英語から構成される事態に注目

表現された英語からの事態構成が鍵

## 異なる事態の例

She was so angry, and could not hold her anger back.

She is cool and always keeps her anger down.

「怒りを抑える」 hold her anger back / keep her anger down  
 怒りの感情を表に出さないようになんとか一時的に押さえる  
 怒り心頭に発することがないように落ち着かせた状態を保つ

I'm not going to give up, never give in. (この大統領選を)諦めたりしない、決して。

give up: 大統領選というレースを放り出す

give in: 相手候補に譲歩する(軍門に下る)

「この写真を見ていると子供の頃を思い出す」

This photo brings me back to my childhood.

This photo takes me back to my childhood.

---

## 英語の文章の理解

listening mode / reading mode

TEXT

Content Construction (内容構成)

Empathic Projection (意図・態度・表情の把握)

Expectancy-based Comprehension (トップダウン的な予測読み)